

エジプト学研究第 19 号 2013 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2012 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 18 次発掘調査－	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一	15
第 3 期アメンヘテプ 3 世王墓壁画保存修復プロジェクト概報	吉村作治・西坂朗子・高橋寿光	43
アメンヘテプ 3 世王墓壁画に使用された顔料の化学分析	高橋寿光・西坂朗子・阿部善也・中村彩奈・中井 泉・吉村作治	59
アメンヘテプ 3 世の石棺蓋の保存修復作業概報	吉村作治・苅谷浩子・西坂朗子・高橋寿光	97
第 5 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光	107
エジプト国家形成期の集落址調査－ヒエラコンポリス遺跡 HK11C における近年の発掘調査－	馬場匡浩	121
〈論文・研究ノート〉		
ナイル川下流域における石製容器の出現と展開に関する一考察－模倣と技術からみたその系譜－	竹野内恵太	135
〈卒業論文概要〉		
ナイル川下流域における石製容器からみた初期国家形成の様相 －先王朝時代から第 1 王朝時代を対象として－	竹野内恵太	151
古代エジプト・建造物の天井に残されたネクベト画像の考察	大橋陽子	159
〈活動報告〉		
2012 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		167
2012 年 エジプト調査概要		171
〈編集後記〉	近藤二郎	177

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

CONTENTS

Preface	3
Field Reports	
Report of the Activity in 2012, Project of the Solar BoatHiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Eighteenth SeasonSakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO and Shinichi NISHIMOTO	15
Report on the Conservation Work on the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22)Sakuji YOSHIMURA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI	43
Chemical Analysis of the Pigments Used in the Wall Paintings of the Royal Tomb of Amenophis IIIKazumitsu TAKAHASHI, Akiko NISHISAKA, Yoshinari ABE, Ayana NAKAMURA, Izumi NAKAI and Sakuji YOSHIMURA	59
Report of the Conservation of Sarcophagus Lid of Amenophis IIISakuji YOSHIMURA, Hiroko KARIYA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI	97
Preliminary Report on the Fifth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian ExpeditionJiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI	107
Excavating Settlement site in the era of Ancient Egyptian State Formation: Recent Excavations at HK11C, Hierakonpolis	121
Articles	
Some Remarks on the early development of the Stone Vessels in the Nile ValleyKeita TAKENOUCI	135
Summary of the Recent Undergraduate Theses	151
Activities of the Society, 2012-13	167
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2012	171
Editor's Postscript	177

ナイル川下流域における石製容器からみた 初期国家形成の様相

—先王朝時代から第1王朝時代を対象として—

竹野内 恵太*

1. はじめに

エジプトの先王朝時代は、ナイル川下流域をその舞台として、続く第1王朝時代に政治的地域統合を達成するまでの胎動期に位置づけられる。該期にナイル川下流域の社会は工芸の専門化や交易活動、社会的不平等が進展し、社会経済状況において著しく複雑化していく。一方で、威信財あるいは奢侈品やその素材となる資源のコントロールを媒介としてエリート層の形成が助長され、また諸地域を横断するイデオロギーや象徴的行為といった観念領域の共有が促進される。社会レベルでは首長制社会から国家社会の移行を示し、親族関係を原理とする社会構造から王権を基盤とする社会構造への変容も認められるため、当該期はきわめて重要な時期である。

本卒業論文では、威信財としてのあり方が指摘されている石製容器に焦点を当てた。石製容器は、素材の獲得から製作に至るまでに投下された労働力の高さからしばしば大規模遺跡における専門的生産を背景とした物財という認識が強い。既往の研究は、ピートリ (Petrie, W.M.F.) によるSD編年構築 (Petrie 1901, 1920) を端緒として、以降、器形分類や石材研究、技術研究、分布研究といった領野において諸研究者が各論を展開するに至る。しかし、分類などの基礎研究の充実を評価しつつも、器形や素材となった石材構成の変遷や分布という具体的な研究が欠如しているのが現状である。総体的な分析が望まれる一方で、威信財としての性格を内包する物財を定量的に扱うことができるため、当該期の初期国家形成という社会の様態変化との関係性を析出することが十分に可能であろう。

こうした視座に立脚し、本卒業論文では、石製容器の総体的な分析を行い、いかに初期国家形成の脈絡の中で変化していったかを論じた。

2. 石製容器の研究抄史と本論の目的

先王朝時代の石製容器研究は、ピートリのSD編年の構築作業に端を発する。以降、器形分類と編年案の構築 (Aston 1994; El-Kouli 1976; Payne 1994) や使用された石材の岩石学的分析 (Lucas 1930; Aston 1994)、製作技術の復原 (Stocks 1993, 2000, 2003)、分布研究 (Mallory-Greenough 2000) が挙げられる。

器形分類などの基礎研究に重点が置かれている中で、管見に触れる限り石製容器の分布研究から具体的に歴史叙述にまで食い込んだ唯一の研究にマロリー・グリーノー (Mallory-Greenough, L.M.) の玄武岩製容器

* 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

の分析がある。マロリー・グリーンローは、先王朝時代から第1王朝時代に該当する玄武岩製容器の分布変化を分析し、第1王朝時代になると玄武岩製容器は「商人」の手によって分配されていたと結論づけた。しかしながら、氏の研究は、玄武岩製のもののみ限定したこと、結局のところ先王朝時代と第1王朝時代の比較のみに終始したため先王朝時代の漸次的な変化を描ききれなかったことが問題点として挙げられる。そのため、器形や石材構成の経時変化および分布、また器形と石材の組み合わせといった総合的な分析を試みる必要性にある。

先王朝時代において石製容器を分析することは、それ自体の研究史上の意義だけでなく、社会経済状況における発展・変化の著しい該期を理解するうえで、一石を投じることができるだろう。というのも、石製容器がいわゆる威信財あるいは奢侈品であり、被葬者の社会的威信を表示する物財であると認識されていることにある。ホフマン (Hoffman, M.A.) は、石製容器は岩石がもつ恒久的な物質上の性格ゆえ、エリートが自身の来世観である永遠性を反映させたと想定している (Hoffman 1969)。このような物財は、しばしば支配者によって独占的にコントロールされるものであり、政治的権力を拡大するためのツールとして機能する。ブルムフィールド (Brumfiel, E.M.) やアール (Earle, T.K.) らによると、こうした威信財あるいは奢侈品の生産・交換を統括する支配者の活動は、政治的発展期において共通して強化されるものであるという (Brumfiel and Earle 1987)。

すなわち、本卒業論の目的は、1) 器形や石材構成、その組み合わせ関係を通時的・共時的に分析し、2) 時期差と地域差を捉え、3) 社会的変化、とりわけ初期国家形成という視座から論じることにあつた。

3. 対象資料・時期と分析方法

本論の対象遺跡はアルマント遺跡 (Mond 1934)、ナカダ遺跡 (Baumgartel 1970; Payne 1987; Petrie 1896)、アビュドス遺跡 (Petrie 1901b, 1901c)、アムラー遺跡 (Randall-Maciver and Mace 1902)、マハスナ遺跡 (Ayrton 1911)、マトマール遺跡 (Brunton 1948)、バダリ遺跡 (Brunton and Caton-Tompson 1928)、モスタゲッダ遺跡 (Brunton 1937)、ゲルゼ遺跡 (Petrie 1912)、ハラゲ遺跡 (Engelbach 1923)、タルカン遺跡 (Petrie 1913)、サッカカラ遺跡 (Emery 1949)、ミンシャト・アブ・オマル遺跡 (Kroeper and Wildung 1994, 2000)、計13遺跡である。考察の対象である遺物は、これらの墓地遺跡から出土した先王朝時代から第1王朝時代に年代づけられる総計1006個体の石製容器である。本論では便宜的に、アルマント遺跡とナカダ遺跡を「ナカダ地域」、アビュドス遺跡とアムラー遺跡、マハスナ遺跡を「バダリ地域」、マトマール遺跡とバダリ遺跡、モスタゲッダ遺跡を「バダリ地域」、ゲルゼ遺跡とハラゲ遺跡を「衝突地域 (Confrontational area)」とした。

器形分類については、本論で新たに設定した (図1)。先行研究を参考とし、6つのクラスを設定したのち、個々のクラスではさらにサブクラスを設け、計30のタイプにした。クラス1は円筒形、クラス2は管状把手付き壺形、クラス3は耳状把手および脚台付き壺形、クラス4は皿形・鉢形・坏形、クラス5は無把手壺形、クラス6はピーカー形である。クラス3は、南メソポタミアにその祖形が認められる器形であり (Arkell and Ucko 1965)、耳状把手あるいは脚台のどちらかが付属しているものを当クラスに位置づけた。なお、本論で扱う時期区分はヘンドリックスの編年に基づき、I C期、II A-B期、II C-D期、III A-B期、III C1期 (第1王朝時代) の5期に区分した (Hendrickx 1996, 2006)。

IV. 分析結果

ここでは、器形と石材構成、その組み合わせの顕著な傾向を時期ごとにまとめて記述していく。

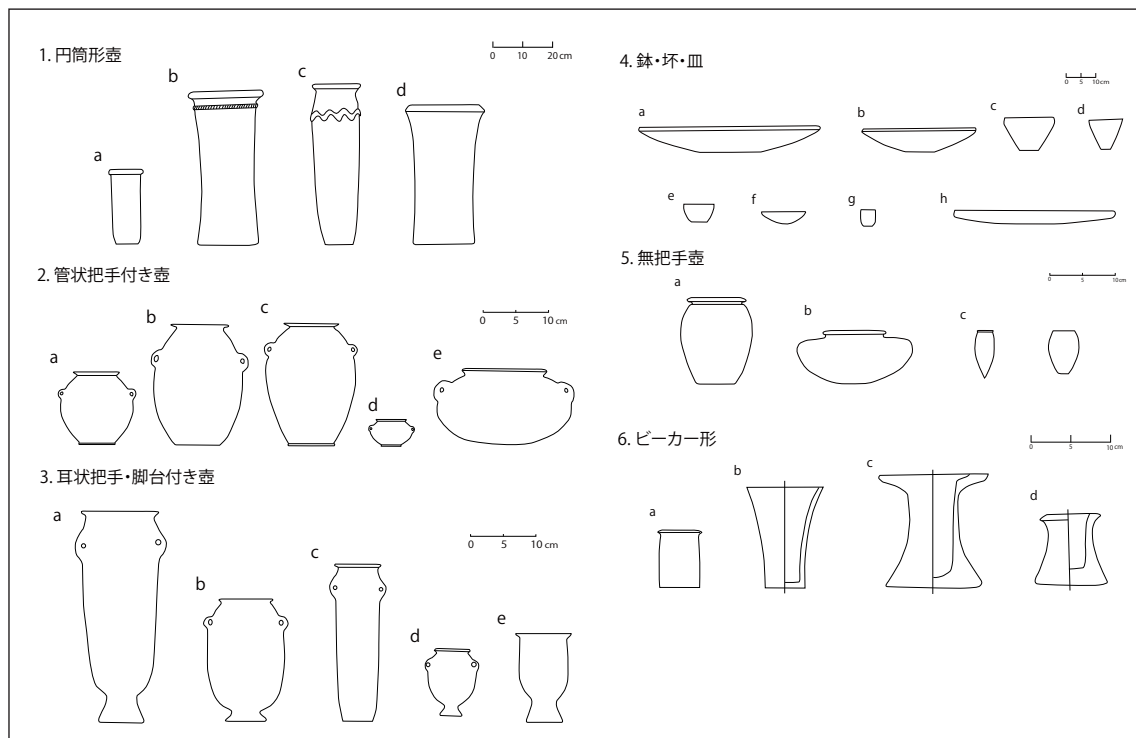


図1 本卒業論文で設定した石製容器の器形分類案

(1) I C 期

I C 期には玄武岩や石灰岩、アラバスターを素材として、器形が地域的に散発でごく少量である。この時期に主体を占める器形は、クラス3とクラス6である。とくにバダリ地域とアビュドス地域およびナカダ地域の間には、前者のタイプ6aの不在という地域差を認めることができる。このクラス6はバダリ文化期の象牙製容器にその祖形があるため、当器形の地域間の有無は重要な傾向として捉えられるだろう。また、該期では、クラス3は玄武岩、クラス6は石灰岩およびアラバスターという明確な石材選択にある。

(2) II A-B 期

該期もI C 期に引き続き、石材構成に変化はなく、上述した地域間におけるタイプ6aの有無も継続して見受けられる。II A-B 期では、タイプ1cおよびタイプ2b・2eが若干数出現し始めるとともに、クラス3は玄武岩だけでなく、石灰岩や大理石も素材として用いられるようになる。また、クラス3が主体を占めるナカダ地域とアビュドス地域に反して、バダリ地域ではクラス2と5のみ出土し、器形において両地域間で地域性が表れている。しかしながら、全体的に主流である器形と石材構成は前時期と比べそれほど遜色ないと言ってよい。

(3) II C-D 期

従来指摘されているように、管状把手付きの壺形であるクラス2が該期に急増する。また、クラス4も同様に増加を見せ、前時期までのクラス3および6という器種構成と取って代わるように、クラス2と4が増える。クラス2については上下エジプトで共通して出土しているが、下エジプトではクラス4が圧倒的多数を占める。翻って上エジプトにはクラス4がほとんど出土せず、上下エジプト間で明確な地域差が表れている。一方で、上下エジプト全域で均質な形態(クラス2と4)と東部砂漠由来の硬質な石材(粘板岩・凝灰岩)および火成岩類(角礫岩・斑岩・蛇紋岩)への指向がみとめられた。東部砂漠で産出する石材を用いた石製容器に関しては、該期ではナカダ遺跡で排他的に出土し、当遺跡を離れるごとにその数は減少傾向にある。

このようなナカダ遺跡を中心とした石材構成のグラデーションは、おそらく東部砂漠へアクセスしやすいワディ・ハンママトおよびワディ・ケナに近接した地理的差異に起因していると考えられる。また、多様な石材が使用されることと並行して、器形に対する石材の選択はこの時期になると完全に乖離する傾向にある。

(4) III A-B 期

第1王朝時代の直前期であるIII A-B期にも急激な変化を示し、クラス1や4、5が主流となり、石材もアラバスター、次いで石灰岩への指向が顕著なものとなる。この段階になるとナイル川下流域全域で地域差は完全に消失し、石材構成についても同様な傾向を示す。また、石製容器の絶対量も飛躍的な増加を見せる。

(5) III C1 期

国家的統一段階、第1王朝時代(III C1期)を迎えると、王墓地に比定されているアビュドスとサッカラ、ローカルエリート墓地であるタルカンとミンシャト・アブ・オマルの両者で形態と石材において著しい地域差がみとめられる。後者ではアラバスターや石灰岩を用いてクラス1および4といった簡素な形態しか出土しないが、前者は把手付きの壺形であるクラス2など多様な器形と石材の石製容器が夥しい量出土する。ただ、サッカラには片岩の割合が顕著であり、アビュドスには見られず、石材構成において差異がある。

4. まとめ

上述した結果から、まずI C期には二つの異なる系譜にある石製容器を捉えることができる。玄武岩を素材とするクラス3は、化学分析によってデルタ地帯南端部からファイユーム周辺で産出するものを用いていることがわかっているため(Mallory-Greenough 1999)、おそらくマアディ遺跡で製作されたクラス3の玄武岩製容器が上エジプト地域へ搬入したと指摘されている(Guyot 2008; Mallory-Greenough 2000)。一方、クラス6は、バダリ文化期の象牙製容器にその起源を求めることができ(Adams 1988; Arkell and Ucko 1965)、該期において下エジプト由来の石製容器と上エジプトにおいて伝統的な器形をもつ石製容器といった二者の系譜を認めることができるだろう。

こうしたII A-B期までの様相は、続くII C-D期に大きな画期を迎えることとなる。クラス2と4への転換、石材構成の多様性がその一つの傍証となる。様々な素材をもって一律の器形が地域的に横断する形で見られることは、ケーラー(Köhler, E.C.)が指摘するような、各地域センターを跨いだ工房ネットワークによる技術的共有として捉えることができると考える(Köhler 2008)。統一国家直前期であるIII A-B期になると、前時期と比べ飛躍的な量が生産されるようになる。円筒形や鉢形、無把手壺形といった器形は、把手の作出不があることや内面を垂直に穿孔・研磨するだけでよいから、把手のついた壺形よりも加工しやすかったのであろう。また、ほぼ加工のしやすいアラバスターと石灰岩に限定した石材構成を示すことから高い度合いの規格化を示す。該期より石製容器は大量生産の下で製作が行われていたと指摘できる。II C-D期にすでに規格化が進展していたが、III A-B期の国家形成段階でより進行した様相を見せる。II C-D期には石製容器の器形に地域差が存在すると言っただけだが、III A-B期には上下エジプトで器形・石材ともに差異が消失し、その社会背景に政治的統一の動態を認めることができよう。一方で、III A-B期までクラス6がゲルゼ遺跡とハラゲ遺跡を北限として、上エジプト地域にしか出土しない。クラス6が新石器時代のバダリ文化の系譜にあることを勘案すると、興味深い傾向であると言える。

そして第1王朝の幕開けとともに、器形および石材構成は王墓地あるいは高官墓地のアビュドスとサッカラ、ローカルエリート墓地のミンシャトとタルカンの両地域で二極化を示す。前者に多様な器形と石材をもつ石製容器が排他的に出土することは、該期の地域的な権力差を垣間見ることができる。この時期から石製容器生産において、王あるいは中央機構に従属した工人集団やその下で統括された石材の獲得・分配システ

ムがあったと想定しても差し支えないだろう。

5. おわりに—課題と展望—

本卒業論文では、これまで具体的に分析されてこなかった石製容器の器形および石材構成、そしてその組み合わせ関係の変遷と分布を追った。時期を経るごとに、徐々に器形と石材において地域性は消失するが、第1王朝時代になると地域的な権力差を背景とした地域性が出現することを捉えた。結論として、初期国家形成という社会様態の変化の中で、石製容器もその性格が変容していたと解釈する。おそらくⅢ A-B期以降の規格化および大量生産化の以前は、希少品あるいは外来のステータスを表示するようなものであった可能性を指摘できる。加えて、石材資源という視点からも初期国家形成を論じられる可能性を示すことができたと思う。本卒業論文は報告書レベルから脱する分析ではないが、総体的かつ仔細に分析することで、石製容器の変化と初期国家形成の動態を理解でき、また新たな知見を見いだすことができた。

しかし、あくまで報告書の情報であるため、容器の法量や表面の研磨、またサイズに関して分析項目を設けることができなかった。各報告書にある石材同定の精度も一概に信用することはできない。これらの反省点は今後実見および資料化することで解消していきたい。

また、石材選択と技術選択の間にある関係性も問題として残すところになった。素材となる石材の性質は一様ではなく、その性質に沿った技術や工程は異なっていたと想定する方が妥当である。とく減算的に製作していく石製容器、ひいては石製品の場合、石材ごとの確固たる技法が存在していたはずであろう。つまり、石材の選択と技術の選択の間には何らかの関係性があったはずだし、器形の違いを技術的相違に求めるのであれば、Ⅱ C-D期における関係性の乖離は、そのような製作技術の側面からも重要な現象として捉えることができる。石材選択と技術選択の観点も、同様に石製品一般にもアプローチしていくべきである。

そして埋葬行為という側面からも分析し、議論していく必要がある。素材の獲得から、製作・加工、分配、副葬といった遺物のライフヒストリーを論じることで、はじめて一つのモノからその背後にある社会の実像を追証し、描き出すことが可能となる。

参考文献

- Adams, B.
1988 *Predynastic Egypt*, Aylesbury
- Arkell, A.J. and Ucko, P.J.
1965 “Review of Predynastic Development in the Nile Valley”, *Current Anthropology* 6, pp.145-166.
- Aston, B.G.
1994 *Ancient Egyptian Stone Vessels: Material and Forms*, Mörlenboach.
- Aston, B.G., Harrell, A.J. and Shaw, I.
2000 “Stone”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I(eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.5-77.
- Brumfiel, E.M. and Earle, T.K.
1987 “Specialization, Exchange, and Complexity Society: An Introduction”, in Brumfiel, E.M. and Earle, T.K(eds.), *Specialization, Exchange, and Complexity Society*, Cambridge, pp.1-9.
- Brunton, G.
1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*, London.
1948 *Matmar*, London.
- Brunton, G. and Caton-Tompson, G.
1928 *The Badarian Civilisation and Predynastic Remains near Badari*, London.
- El-Kouli, A.
1978 *Egyptian Stone Vessels: Predynastic Period to Dynasty III, Typology and Analysis*, Mainz am Rhein.

Hendrickx, S.

1996 "The Relative Chronology of the Naqada Culture: Problems and Possibilities", in Spencer, J. (eds.), *Aspects of Early Egypt*, London, pp.36-69.

2006 "Predynastic-Early Dynastic Chronology", in Hornang, E., Krauss, R. and Warburton, D.A. (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden and Boston, pp.55-93.

Hoffman, M.A.

1979 *Egypt Before the Pharaohs*, New York.

Köhler, E.C.

2008 "Theories of State Formation", in Wendrich, W. (ed.), *Egyptian Archaeology*, Oxford, pp.36-54.

Kroeper, von.K. and Wildung, D.

1994 *Minshat Abu Omar I Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gräber 1-114*, Mainz

2000 *Minshat Abu Omar II Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gräber 115-204*, Mainz

Mallory-Greenough, L.M.

1999 "The Stone Source of Predynastic Basalt Vessels: Mineralogical Evidence for Quarries in Northern Egypt", *Journal of Archaeological Science* 26, pp.1261-1272.

2002 "The Geographical, Spatial, and Temporal Distribution of Predynastic and First Dynasty Basalt Vessels", *The Journal of Egyptian Archaeology* 88, pp.67-93.

Mond, R.

1937 *Cemeteries of Armant I*, London.

Payne, J.C.

1987 "Appendix to Naqada Excavations Supplement", *The Journal of Egyptian Archaeology* 73, pp.181-189.

Payne, J.C.

1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*, Oxford.

Petrie, W.M.F.

1896 *Naqada and Ballas*, London.

1901a *Diospolis Parva: The Cemeteries of Abadiyeh and Hu 1898-9*, London.

1901b *The Royal of the Earliest Dynasties Pt.II*, London.

1901c *The Royal of the Earliest Dynasties Pt.II: Extra Plates*, London.

1912 *The Labyrinth Gerzeh and Mazghuneh*, London.

1913 *Tarkhan I and Memphis V*, London.

1920 *Prehistoric Egypt*, London.

Randall-Maciver M.A., and Mace, A.C.

1902 *El Amrah and Abydos 1899-1901*, London.

Shaw, I.

2012 "Stone-Working: the Synthesis of Traditional Chained Operations and Ideological Innovations", in Shaw, I. (ed.), *Ancient Egyptian Technology and Innovation: Transformations in Pharaonic Material Culture*, London, pp.55-76.

Stocks, D.A.

1993 "Making Stone Vessels in Ancient Mesopotamia and Egypt", *Antiquity* 67-256, pp.596-603.

2003 "Making Stone Vessels", in Stocks, D.A. (eds.), *Experiments in Egyptian Archaeology: Stoneworking Technology in Ancient Egypt*, London and New York.

エジプト学研究 第19号

2013年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.19

Published date: 31 March 2013

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-cho, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University